Ⅱ　第３部　パネルディスカッション
「農山漁村における郷づくりと建設技術者の果たすべき役割」

パネリスト　吉武　哲信　氏（宮崎大学准教授）
中野　道男　氏（国土交通省九州地方整備局）
井上　　靖　氏（大分県企画振興部）
松本　由利　氏（TEAM GEAR）
渡邊　雪法　氏（柴北川を愛する会）
木寺　佐和記氏（建設コンサルタント）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　波木　健一　　（共助研）

パネリストプロフィール

区分		氏名	所属等
パネリスト	住民の立場から	松本　由利氏 	ＴＥＡＭ ＧＥＡＲ 理事長 ●出身地　　宮城県仙台市 ●現在居住地と居住歴　　長崎県雲仙市千々石町　（６年３ヶ月） ●地域づくりにおいて気にかけていること、モットーなど 足るを知る・クリエーション・コラボレーション
		渡邊　雪法氏 	「柴北川を愛する会」事務局長 「大野川流域ネットワーキング」事務局長 ●出身地　　大分県豊後大野市犬飼町 ●現在居住地と居住歴　　出身地と同じ（但し、昭和４８年から平成９年までは宮崎県串間市在住） ●地域づくりにおいて気にかけていること、モットーなど 全員参加と共通認識
	行政の立場から	中野　道男氏 	国土交通省 九州地方整備局 企画部 広域計画課　課長 ●出身地　　鹿児島県肝属郡錦江町 ●現在居住地と居住歴　　福岡県朝倉郡筑前町　（約２０年） ●地域づくりにおいて気にかけていること、モットーなど。 現在、隣組の組長。挨拶と笑顔で会話すること。
		井上　靖氏 	大分県企画振興部　観光・地域振興局　局長 ●出身地　　大分県佐伯市 ●現在居住地と居住歴　　大分県大分市 (以上、大野川流域ネットワーキングＨＰより)
	第三者の立場から	吉武　哲信氏 	宮崎大学工学部 土木環境工学科 准教授 ●出身地　　山口県 ●現在居住地と居住歴　　宮崎県清武町（１４年） ●地域づくりにおいて気にかけていること、モットーなど。 その地域の人たち(リーダーや担い手)と飾らない関係をつくり、一緒に行動すること。
		木寺　佐和記氏 	西日本技術開発(株)　土木本部統括部長 「共助研」柴北川プロジェクト山桜班副班長。 ●出身地　　長崎県松浦市福島町 ●現在居住地と居住暦　　福岡県福岡市（大学から現在まで） ●地域づくりにおいて気にかけていること、モットーなど。 人はやはり自然の一部。「地方無ければ都会成さず、営み無ければ地方は荒び、国土荒めば人も育たず」。
コーディネーター		波木　健一 	㈱福山コンサルタント　本社事業部技師長 「共助研」事務局長。 ●出身地　　山口県宇部市 ●現在居住地と居住歴　　福岡県北九州市（３３年） ●地域づくりにおいて気にかけていること、モットーなど。 つくることを楽しむこと。

【写真はＨＰから転用】

第 3 部記録

司会（波木）＞

続きまして、パネルディスカッションです。

先程、共助研の活動報告ということで、この 1 年間の事をお話させて頂きました。冒頭に吉武先生が紹介された活動の内容と比較してみると、まだまだ、本当に何をやっているのだろうというような暗中模索の感が強いのですけれども、ただ、私たちはやはり、建設技術者、建設コンサルタントであるという自分たちの特性を引き出しながら、進めて行きたいということは強く思っておりまして、その辺りを少し感じて頂けたらと思いました。

今から 1 時間と少し、パネルディスカッションを行いたいと思っていますが、今日は、行政の立場、それから地域住民の立場、そしてそれを外部から支える都市住民という第三者の立場という 3 つの立場で、それぞれの活動をされている第一人者の方に集まって頂いています。それぞれの立場からの活動状況を報告し合いながら、お互いの繋がりをどう作って行くのか、そして今後、それに向けてどんな課題をクリアして行くべきなのかということ、その辺りをお話頂きながら、出来れば共助研のこれからの進め方というところに何かのヒントを頂ければというふうに考えております。

では早速、今日、お集まり頂いておりますパネリストの方に、1 人ずつ自己紹介をお願いしたいと思います。

では、先ず吉武先生から自己紹介をお願い致します。

吉武先生（宮崎大学准教授）＞

吉武哲信です。私の今の先程お話したやり方というのは、ほとんど半分住民みたいな形になりながら、半分都市民の立場でやって来たものだと思います。その村にしょっちゅう行くのですけれども、住民の方も誰も私の顔を見ても驚かない、またいるなという感じで、そういうやり方であったと思います。

一方私は、大学に勤めていて、私自身はプランナーとしてこれを見た時に、どういうふうに見えるのかを考えていて、課題として思っています。こういうやり方、あるいはこうでは無いやり方を含めて、地域づくりにどう繋がって行くか、どう考えて行くか、シーニックバイウェイも少しずつ実験的にやっているところではありますが、少しでも展開をして行きたいと考えており、今模索中というところでございます。

中野氏（国土交通省九州地方整備局）＞

九州地整広域計画課長の中野です。よろしくお願い致します。私は、出身が鹿児島なんですが、今は朝倉郡筑前町に約 20 年間住んでおります。転勤族ということで、単身も 3 回したりとか色々しているもので、地域の人との交流はなかなかありませんでした。

昨年度から隣組の会計をやって、今年は組長をやっています。そういったことで、以前は家内と「この地区の人は冷たいよね」って感じで話をしたこともありましたが、今では顔繋ぎも出来まして、コミュニティーは大事だなと思ってやっています。挨拶をすることと、笑顔で会話をすることを心掛けています。

井上氏（大分県企画振興部）＞

大分県庁の井上と申します。私が大分県に採用されましたのが昭和 50 年代初めで、その時は大分県新産業都市開発局建設管理部に所属して工事経理をしておりました。そこでは大分港の埋め立てや臨港道路の整備で、委託や工事の発注をしており、建設コンサルタントの皆さんにもお世話になりました。三重土木事務所という所で総務課長もしていまして、どちらかというと管理部門、総務部門を中心に仕事をして来ました。8 年前に農政部の村づくり推進室に参りまして、中山間地域と直接支払い制度の定着、グリーンツーリズムの推進、村づくりシンプルジョイントに取り組みました。また、総合交通では、コミュニティーバスの支援、総合交通対策をやりました。

その後、農政部に戻りまして、農協や森林組合の監督・指導を担当し、今、観光地域振興局におります。こちらは平成 16 年 4 月に出来た組織で、ツーリズムの推進を基本理念にしておりまして、観光と地域づくりを一体的に進めて行くことを基本理念にやっております。

大分県では合併が進んでおり、地区の不安や懸念を解消するために、旧町村対策をしております。地域の住民が何かを提案する場合、例えば地域活動の活性化とか、農林水産業の産業の振興とか、伝統文化の保存継承とか、その時に相互補助金を出して支援するという事をしております。また、今日のテーマの「郷づくり」と一致するのですが、人口が減少し、高齢化する地区を「小規模集落」と位置づけて、課題解決に向けた協議や活動に対して、県の立場でサポートしたりやアドバイスしたり、色々な支援をしているところで取り組んでいます。

よろしくお願い致します。

松本氏（ＴＥＡＭ　ＧＥＡＲ）＞

こんにちは、松本由利です。建築士の夫の都合で、宮城県仙台市から長崎県雲仙市千々石町に転居して、7 年目になります。思うところがあって、衰退する地域に特徴的な人材人手不足、排他的地域独占構造、人をタダで使いたがる善意依存体質、安易なパクリ屋さんの 4 つと戦いながら、地域の資源を生かしたライフスタイルの提案、問題解決型の社会システムづくりを、住民が主体となって行って、地域に雇用と定住を促すような活動をしたいということで、「ＴＥＡＭ　ＧＥＡＲ」という任意団体を主催しております。

特に、私個人としては、空家や使われていない施設などを価値を生む新しい地域社会の資本として、再構築し、活用することで食べていきたいという野望を持っております。

よろしくお願い致します。

渡邊氏（柴北川を愛する会）＞

こんにちは。大分県豊後大野市の方から参りました、「柴北川を愛する会」の事務局長をしております渡邊雪法と申します。よろしくお願い致します。

今日、冒頭から柴北川という言葉が何回、何十回出て来ただろうかなと数えておりましたけれど、シンポジウムのご案内に出ておりますのが、私の住んでいる地域です。こう言った谷合の地域が、10㎞ 程続いております。この辺りを長谷地区と言います。その中を、柴北川という綺麗な川が流れております。総延長は 24㎞ 程ありますが、その内の 10㎞ 程が私達の地域を流れております。その川を中心にして、何か地域起こしが出来たらいいな、地域が元気になったらいいなという思いから、平成 18 年に発起人 10 人程集まりまして「柴北川を愛する会」を発足しまして、丸 3 年経ちました。最初は、地域に花をいっぱい植えて、外から来た人を花でおもてなしをしようということから始まり、県道沿いに彼岸花を植えたりして活動を続けておりましたが、ひょんなことから、共助研の皆さんとお付き合いが出来るようになりまして、急展開しまして今に至っております。

今日はよろしくお願い致します。

木寺氏（建設コンサルタント）＞

こんにちは。建設コンサルタント西日本技術開発の木寺佐和記と申します。建設コンサル

タントは波木さんがもう一人おられるのですが、今日はコーディネーターということで中立的な発言しかしにくいと思います。私が一人で、建設コンサルタントもこの分野では、大いに可能性があるということを強調して行きたいと思います。

出身は長崎県北松浦郡で、田舎育ちです。ですから、都市住民と建設技術者の立場で意見を述べますけれど、本当は都市住民と言え無いのかもしれません。

よろしくお願い致します。

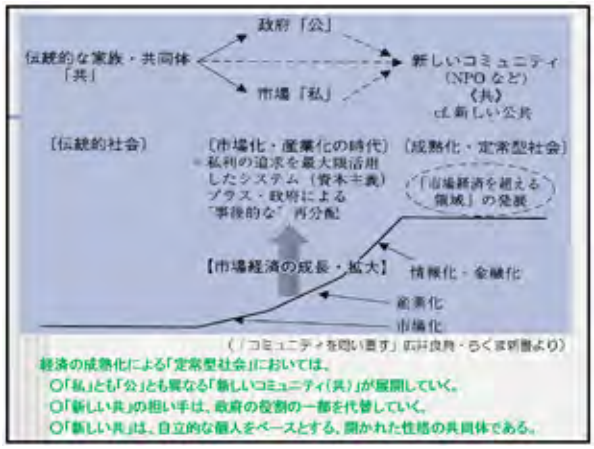
司会（波木）＞

ありがとうございました。最後になりましたが、今日のコーディネーターを務めさせていただきます共助研の事務局長の波木でございます。木寺さんと一緒で建設コンサルタントに勤めております。

6 名の方の議論で進めさせて頂きたいと思っておりますが、それぞれの立場を誇張しながらお互いに議論して行こうという戦いの場では決してなく、この 3 つの立場をうまく兼ね合いながら、お互いに繋がりを作って地域づくりを進めて行くための切り口を見つけて行きたいということで考えておりますので、よろしくお願いします。

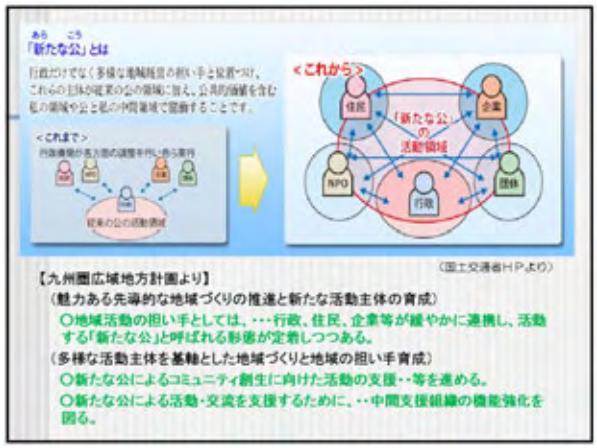
最初に皆さんのお話をうかがう前に、全体的な認識ということで、簡単な資料をご用意致しましたので、パワーポイントを使って説明させて頂きます。

いきなり難しい絵がありますけれど、こちらはある本から引用しました。千葉大学の広井良典先生という方が、今年「コミュニティーを問い直す」という本をちくま新書から出され、大佛次郎賞を受賞されております。これからの社会を作って行くための知恵に関する参考になる著書となってお



ります。その中に載っている「今の時代の認識」という面白い絵がありまして、引用させて頂きました。この絵の中の下に、経済規模の成長過程があり、それに合わせて地域社会の中の関わり方、動きが変わって来たのだということを模式化した絵です。かつては、農業を主体とした社会と言うことで、あまり飛躍的な経済成長は無く、伝統的な社会の下で、農業を主体とした伝統的な家族・共同体と言うものがあって、そこで地域の生活・産業が営まれていたという「共の時代」だと言うことです。それから、明治以降、市場経済の形で経済成長を進めて行くわけです。市場化、産業化、情報化とステップを踏んでいきますが、この際の大きな切り口というのは、私的な利益を追求して行くという市場経済主義、資本主義、これがベースになっていたということです。その際には、市場については私的な利益ですから、民間ベースの経済活動が進められていて、これをコントロールする形で、政府が「公」の役割を果たしている。かつては「共」だけで進んでいた社会システムが、「私」と「公」という形で分かれて、ある意味「公」に大きな地域維持をして行くための役割が担わされた。ところが、成長していた経済がある意味成熟化して来たわけですね。これが現在の状況だと思いますが、これを廣井先生は、「定常型社会」という言葉で説明されています。日本もそういう状況になっていますけれど、経済成長が大きくは望めない高原状の状況になって来た中で、少子高齢化や、環境問題の制約など、さらに市民の皆さんの需要に対するニーズが、金銭的な面である程度成熟化して来たことで拡大が望めない、新たな地域社会の有り様という新しいコミュニティーが再度出て来ているのではないか。今までは全て「公」が、地域住民へのサービスをして来たのに対して、それだけでは埋めていけない新しい形が出来てきているということを示唆されています。「私」とも「公」とも異なる新しいコミュニティー、ここでは「共」という言葉が使われていますが、こちらが展開されて行くのではないか、「新しい共」は自立的な個人をベースとする開かれた性格の共同体であるという形で進んで行くのではないだろうかということが、廣井先生の論文に書かれています。

先程の吉武先生の話にありましたが、「新たな公」が既に国土交通省等の政策展開の中で使われております。これまでは、行政機関が各方面の調整を行い、自ら実行していたという形の従来の「公」の活動領域のパターンでしたが、経済の成熟化と合わせて行き詰まりになっている。そこで、「新たな公」ということで、住民、企業、団体、行政、ＮＰＯ、いろんな活動主体が、お互いに共通の活動状況を持って活動して行くという形です。具体的には、「九州圏広域地方計画」が昨年６月に策定されていますけど、その中においても、地域活動の担い手としては「新たな公」という形態が定着しつつあるという現状認識をした上で、今後の進め方として、「新たな公」によるコミュニティー創成に向けた出発の支援を進める。さらに、交流活動支援を支えるための中間支援組織の機能強化を図るというところまで、「広域地方計画」では提案がされています。こういう時代認識、時代背景、新しい社会体制に対する考え方をベースにしまして、議論して行きたいと思います。



「多様な主体が関わりながら作っていく地域づくり」ということが大きなテーマでございます。今日は 3 つの主体の代表が来て下さっていますので、お互いそういったところを話し合いながら、各主体間の繋がり方、相互補完のあり方というものを話し合って行ければと考えています。また、合わせて建設技術者としての関わり方というものを探りたい。木寺さんは、今日は中立ですという話をされましたが、建コンとしてのビジネスチャンスの目も何か考えて行ければなあと考えています。

早速、皆さんのお話を聞いて行きたいと思います。先ず、現状報告としまして、行政のお二人からお話を聞きたいと思います。九州、もしくは大分県というフィールドの中での農山漁村地域が抱えている課題を、行政として把握されていると思いますが、それに対してどのような施策を打とうとされているのか、最初に国土交通省の中野さんにお話を頂きたいと思います。国という広域の行政のお立場がございますので、余り特定の地域に限定したお話では無いかもしれませんが、国としての広域的な計画づくり、もしくはモデル的な試行、制度設計に取り組まれていると思います。「九州圏広域地方計画」を踏まえて、「九州圏における地域の存続再生に関する調査検討委員会」が昨年から開催され、広域計画課のお立場で主催されておりますので、その辺りの話も含めてお話を頂けたらと思います。

中野氏（国土交通省九州地方整備局）＞

今の委員会のお話ですけれど、吉武先生も委員に入って頂いておりますが、平成 19 年度から取り組んでいます。ご承知のように、国土形成計画は、全国計画と地方計画とで成り立っています。全国計画の時には、過疎地域を対象に集落の調査をしておりまして、全国で 775 市町村を対象にしておりますが、九州の地方計画を立てる時には、九州の全市町村を対象にしたということで 251 市町村、2 万 8 千位の集落を対象に抽出しているという事が、大きな違いだと思っています。

その中で、平成 19 年度から委員会を立ち上げてやって来ているんですけど、19 年度は九州 7 県の 17 地域で、個別に聞き取り調査を行っていますが、課題は、先ず地域産業、経済、生活サービス、地域コミュニティー、交流、国土・地域資源保全ということが浮かび上がっています。それを分類しますと、「地域資産価値の低下」、「人材・組織の低迷」になるかと思っております。

平成 20 年度、21 年度は、統計データとか色々なものがありますが、高齢化率とかそういうのではなくて、実際の集落の実態を把握しようとワークショップや既に移転している集落の状況等を調査して来ております。

元気づくりのきっかけを何とか見出したいということでワークショップをしておりまして、中山間地域が 2 地域で、昨年が西米良村の八重地区で行い、今年は椎葉村の瀧春山地区を、また、離島の方では奄美の加計呂麻で 2 集落をやっております。先進的な取り組み事例のほか、移転した集落の調査としては、阿久根市の本之牟礼、西都市の寒川というのがございまして、それの話を聞いたりしています。

ワークショップのやり方として、1 回目は「気づきの誘発」ということをテーマに「不安」、「資源」、「想い出」をキーワードに行いました。そうすると昔話など色々な意見が出て来ました。2 回目はですね、「取り組みの方向性」ということをテーマに「資源活用」や「不安解

消」について意見を出してもらいましたが、どんどん意見が出て来るんですね。意見が出るということがワークショップの大きな答えだったのかなと思っています。

「不安」を大きく分類しますと、共通して言えるのが「鳥獣被害の増加」と言うのが多いです。鹿なんかで木の皮を剥がれて製品にならないという問題です。次に、災害発生時の避難活動、集落の孤立こういうものの問題、医療施設が遠い、そして高齢化によって共同作業や寄り合いが出来無い、祭りの中止、収入の減少、これも年金生活ということもあります。また、高齢者は車がありませんので、日用品の買い出しが出来ないという事が浮かび上がって来ています。

こういう実態の中で 10 世帯位の小集落で、やっと集落維持が出来そうな所の課題を踏まえまして、資源とかイメージを語りながらワークショップをやりますと、他の集落の人達とか、そこを出ている人達(他出者)とが一緒になって祭りを復活しようとか、空家があればそれを短期滞在型に取り組もうとか、他の集落と一緒に河川や道路の清掃をやろうかとか非常に盛り上がって話が出て来ます。これを見ますと非常にきっかけが大事と言えるかと思います。事前のアンケート調査を見ました時に、「居住継続で最も必要なものは何か」という質問に、「集落内の相互扶助」、「他出者の協力」、「国や自治体の支援協力」と言うのがあるんですけども、実際、元気づくりをやろうとかすると、「周辺集落との協力」、そして「集落内での話し合い」、「取り組む気がない」とか言う意見なんですね。ということは、集落を出て行った人達に、本当は応援に来て欲しいのに、手伝って欲しいとの気持ちは持っているのに、そこにお互いの遠慮があるというのが、事前のアンケート結果と照らしてみると元気づくりへの問題として出ているのではと思っています。

移転集落の事例調査をしましたが、災害による孤立というのがありまして、それをきっかけに一気に移転が始まっているという話があります。もう一つは廃校です。学校があることによって、運動会や文化祭などに人が集まるという事がありますが、学校が無くなると、集まるきっかけが無くなります。学校が無くなった事で、子供がいる家庭は外に出て行かなければならない。そういう事が、集落に元気が無くなる要因となっています。

もう一つは、公共交通機関の減少です。採算が取れないとそこに入ってきません。高齢者になると車を運転出来ないので、何かあったら誰かに乗せてもらわないといけない、便乗させてくれる人がいないとタクシーを使わなければならないと言う事です。また、水道がありませんので、沢の水を取るという水道管理の問題、高齢者には大変な作業ですから、このような事も移転した背景にはあるかと思います。

そういう状況調査をする中で、集落の維持・再生の課題を考えた時に、当然地域の発意というものが前提にあるのですが、ワークショップを 1、2 回やっただけでも、やる気になってもらえるということです。やはり、きっかけづくりの担い手の存在は大事で、地域へ刺激を与える継続的な支援体制のあり方を考える必要があると思います。

それをやるために何が課題なのかと考えた時に、集落のリーダーがいないというのが大きいです。もう一点は、集落と集落を出られた方との気持ちの交流ですね。お互いが遠慮していると言う事です。

国、県、市町村が、いろんな補助事業をＰＲしているつもりですが、なかなか集落まで伝わっていないということですね。国、県、市町村の役割をどう受け持つのかが大きなテーマ

だと思っています。存続の危うい集落の判断は、主観的なところが大きいので、今後は皆が同じ土俵で判断するためにも客観的な指標を作成し、危うい集落をしっかり見極めて行くことが重要かと思っております。以上です。

司会（波木）＞

ありがとうございました。続きまして、大分県の井上さんですが、自己紹介にもありましたように、県内に多く発生しております中山間地域の小規模集落の活性化について、県独自の施策を打たれていると聞いております。その辺りを主体にお話をよろしくお願いします。

井上氏（大分県企画振興部）＞

大分県の井上です。手元に「大分県の小規模集落の現状と対策について」という資料がございますので、これを見ながら話を聞いて頂けたらと思います。今日のシンポジウムは、「農山漁村の郷づくり」ということですが、私どもは地域づくりをやってまして、「郷づくり」と一般的な「地域づくり」とは、エリア的に重なるというふうに見ております。また、農村集落においては、中山間地域だろうと平地であろうと軽度の差はありますが、コミュニティーが崩壊しているとか、耕作放棄が進んでいるという状況にあります。

県としては、このようなエリアを「過疎地域」と条件づけ、地域として守っていかなければいけないということをテーマに、一生懸命取り組んでいるところであります。そういうことを前提に、小規模集落について説明させて頂きます。

P1

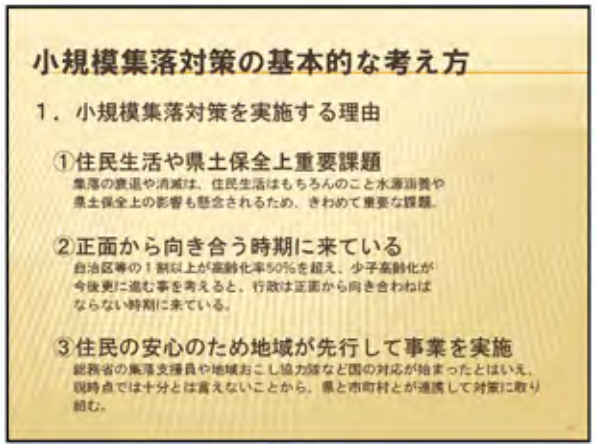
1ページの下の方に、「大分県の自治区等の状況」がございます。18の市町村が大分県にはございまして、4,156 の自治区がございます。そして、高齢化率50%を超えている集落は 477、これを「小規模集落」と呼んで、今、取り組みを進めております。

P2

次の 2 ページですが、「特に高齢化が進んだ小規模集落の主要課題」ということで、平成 20 年に 2 回目の調査をしております。70 歳以上の割合が高い地区等を中心にアンケートを取りました。21 集落の課題があります。先程お話にもありましたが、鳥獣被害が高く 52.6%の高さです。

もう一つは、高齢化が進んで、地理的条件の厳しさが反映していると考えられる課題が上位にあります。それが、集落に繋がる道路整備、それから集落外への交通手段の確保の困難、こう言った足の確保でございます。

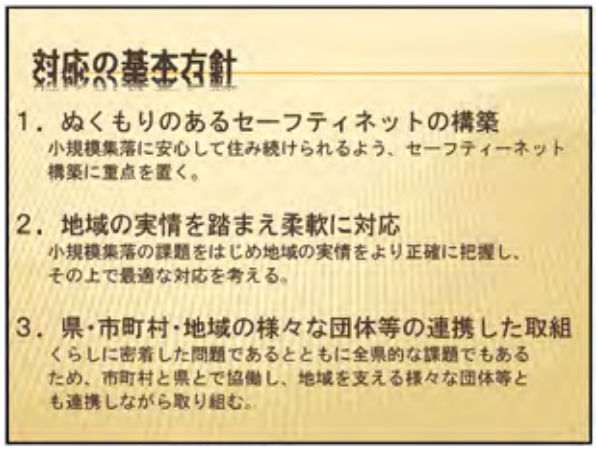
課題への対策の基本的な考え方は、住民生活や県土保全上の重要課題であるというふうに、行政の方では認識しております。人口減少と高齢化を考えますと、行政としましては、有効な対策を早急に取り入れる必要があるという考えのもとに進めております。



③に書いておりますが、総務省の集落支援が平成 20 年 8 月に始まりました。それから、平成 21 年度には、「地域起こし協力隊」を送るという事もありまして、まだ、国は始まったばかりですので、今は県と市町村が連携をして現場に入って、先行して取り組んでいるという状況です。

P3

3 ページですが、実践としての具体的な基本方針としましては、「安心して暮らせる生活対策」を優先しています。住民の意向によって、是非活性化策をやりたいという場合に、それをやるという取り組み方をしています。

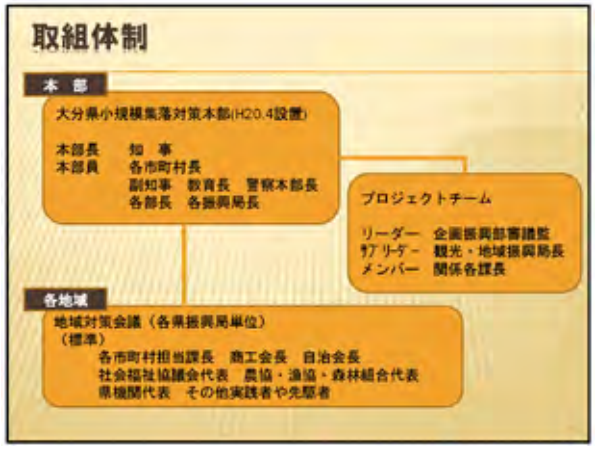


2 番目ですが、集落によって実情が違います。その実情の違いを知るために、現場に行って、住民の方に直接面談をして話を聞く事により、実際の課題に対する最適な対応を考えるという事をしております。

3 番目ですが、こうした対応が過疎地域等としての条件不利地域に共通する課題でもありまして、なかなか行政だけでは対応出来ません。市町村と県とで共働しながらも、地域を支

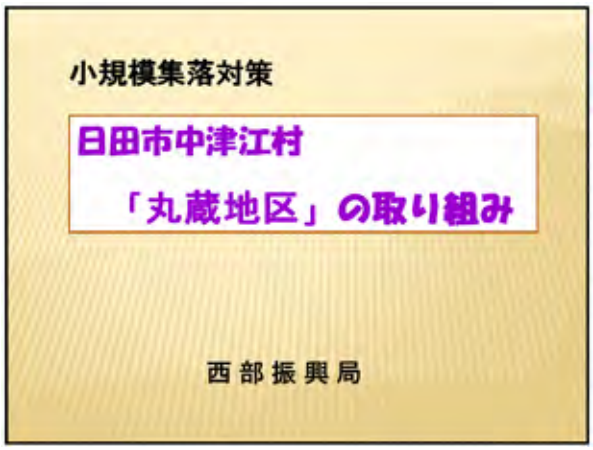
える様々な団体と連携しながら、取り組んで行くとの認識に立っております。

3ページの下の方に「取組体制」がございますが、平成20年4月に「小規模集落対策本部」を作りまして、知事をトップに各市町村長などを構成員に組織を作っております。各地域、エリア、大分県の場合には振興局、出先には6地域ございますが、それぞれに地域対策会議を設けまして、各市町村、商工会、自治会などに入ってもらい、議論・検討するようにしております。



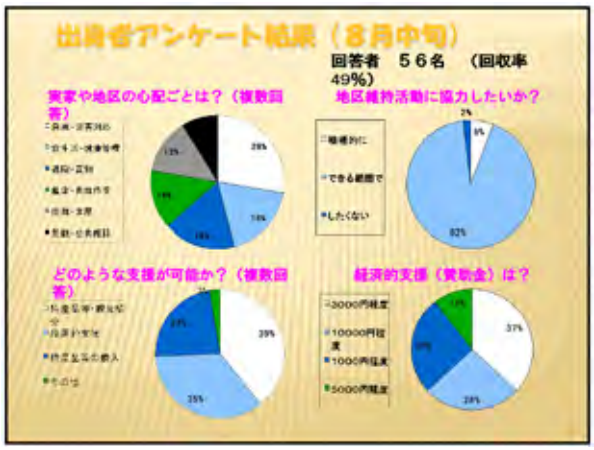
P4

4ページですが、具体的な例示としまして、平成20年度から始めた「小規模集落対策」。県のモデル地区として23集落を選んでおります。その中の一つが、日田市中津江村丸蔵地区です。サッカーのカメルーンのキャンプ地になった所ですが、87 世帯、214 人の人口で、高齢化率 57.9%という所であります。



4ページの下に、丸蔵地区の出身者のアンケート結果を出しておりますが、実家や地区の心配事では、急病や災害対応が 28%と高くなっております。

56人に回答をお願いしたのですが、「協力したいですか」という話の中で「出来る範囲でしたい」という 92%を入れて、98%が協力するというスタンスになっています。



支援の仕方については、「特産品等・観光紹介」の次に、「経済的支援をしたい」ということで、右の方には「賛助金」という言葉を使っておりますが、37%が3千円、26%が1 万円というふうに協力したい、集落に対する思いは強いというふうに感じるところであります。

P5

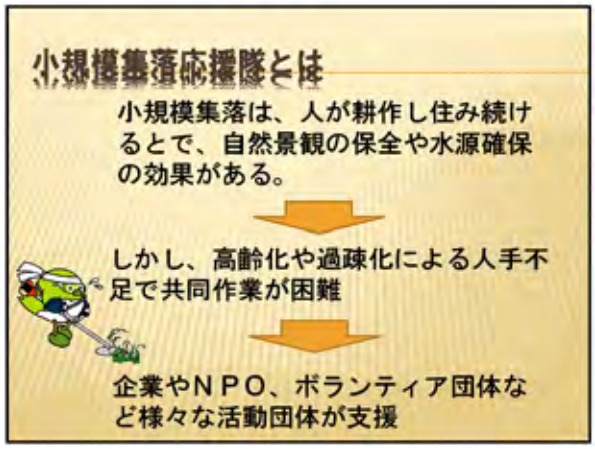
5ページですが、「ふるさとの絆による交流と支援の仕組み」ということでポンチ絵を書いておりますが、集落の出身者を他出者と呼んでおりますが、今、91人で「応援団」を作っているそうです。集落の方で、催事等があれば参加しています。また、地区住民委員が活動をすれば、賛助金、経済的支援をしています。集落の方も「見守り隊」を作っておりまして、老人会、さくら会、これは女性婦人会ですね、それから青少年の親睦会、こういう所で「見守り隊」を作って目配り、気配りをしている。それから、「見守り隊」と「応援団」の交流、あるいは共働で催事をしています。下の写真が交流の場ですが、県がモデル的な実施をしておりまして、市町村との共働作業で取り組んで、ノウハウを蓄積して行って、これから取り組む市町村の一助になったらどうかなと言う事で、県がモデル的にやっているところであります。

課題としましては、集落の継続的な自主的な活動も、70代、80代の方が中心になると、なかなか継続は難しいのではないのかという課題がありますし、また、元気対策や活性化対策をやろうというリーダーがいないという課題があります。

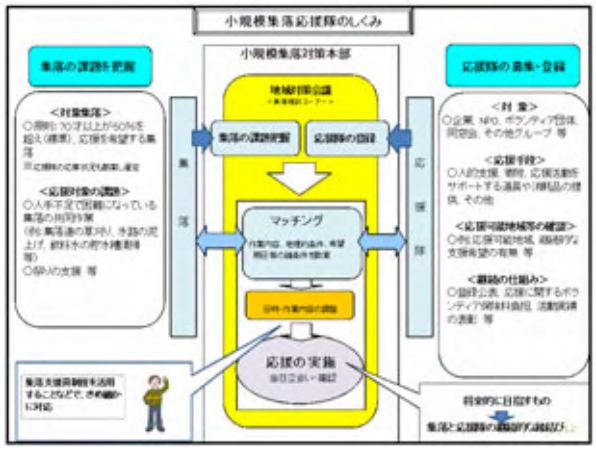
それから、広さとしては、丸蔵地区は旧小学校単位でやっているわけですが、エリアがそういう広さであれば良いんですが、隣の集落が遠いという場合には、周辺集落が協力してもらえないという課題があります。

P6

6ページをお願い致します。実態調査の中で住民の現状として、老いて行くという中で、労務の提供が難しくなって来ています。生活道路や水路を共同作業でやって来たのですが、困難になって来ているという話を受け、平成21年度から「応援隊」を募集して要請のあった集落に派遣する仕組みを作っている、外部支援の導入という事であります。

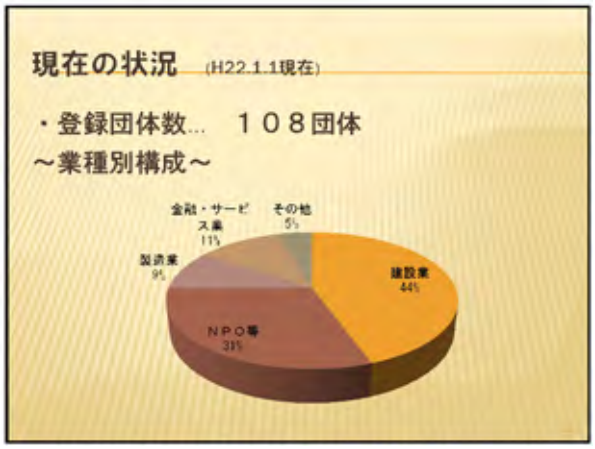


6 ページの下には、「小規模集落応援隊のしくみ」として、右の「応援隊の募集・登録」の方ですが、「応援隊」の募集については県が責任を持って県内全域で募集をしておりまして、登録をしております。左の方に「集落の課題を把握」とありますが、市町村で 70 歳以上が 50%の集落に対しまして、集落の応援を要請しないかと投げかけて、調整して、「希望集落」を集めております。その「希望集落」、「要請集落」と「応援隊」をこの真ん中の「地域対策会議」でマッチングをさせているという仕組みになっております。

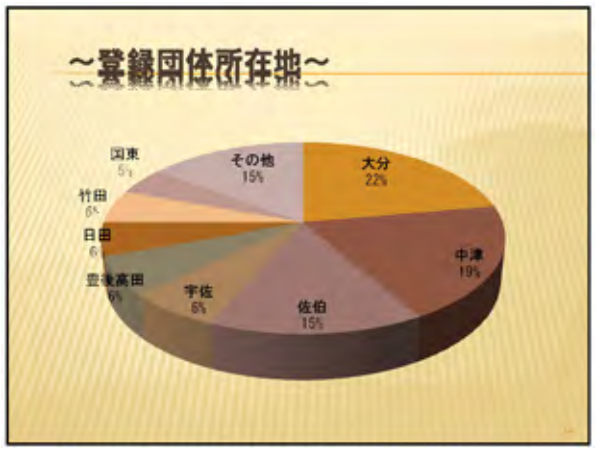


P7

次に 7 ページですが、今、「応援隊」は約 108 団体ありまして、建設業は 44%、ＮＰＯ等は 31%ということで合わせて 75%です。先程、「大野川流域ネットワーキング」の話にもありましたが、そこの「結」も近日中に登録すると聞いたところでございます。

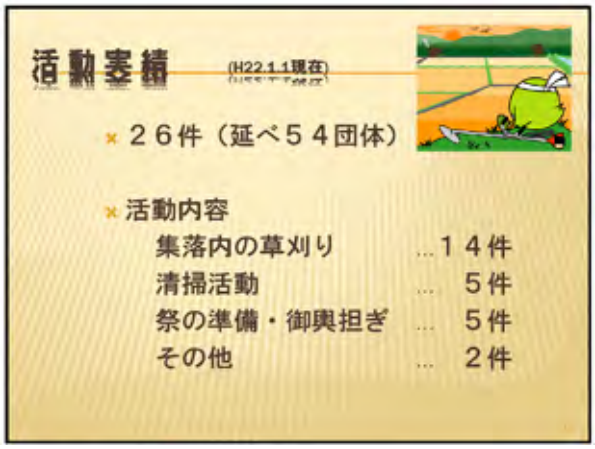


登録団体の所在地は、県内、大分、中津、佐伯と県内の全域に「応援隊」が登録されているということです。

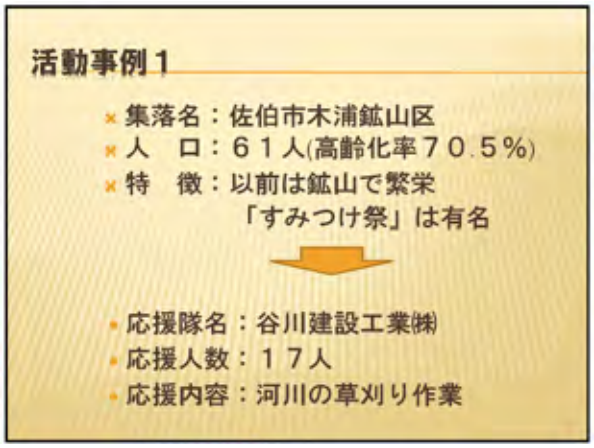


P8

8 ページをお願い致します。「活動実績」と致しましては、延べ 54 の「応援隊」が 26 の集落に参加しております。「集落内の草刈り」、「清掃活動」という事をやっております。



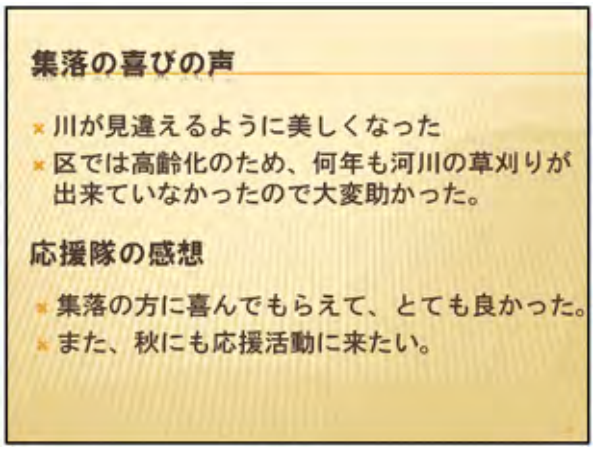
「活動事例」としましては、その下ですが「すみつけ祭」で有名ですが木浦鉱山区、ここに谷川建設工業が入りました。17 人で河川の草刈り作業をやって頂きました。



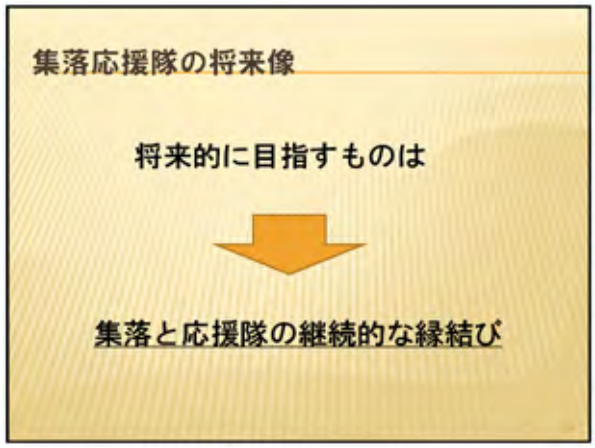
P9

9 ページには、活動状況の写真がございますが、最終的には交流会をして終了したということです。

「集落の喜びの声」としまして、「何年も河川の草刈りが出来なかったが美しくなった、よかった」とあり、「応援隊」もその喜びの姿を見て、「これからも応援していきたい」という話だったそうです。



最後に、「応援隊」の課題は、要請する集落も一緒になって活動しなければいけない。また、対応しなければいけないところで、応援を要請する集落・ニーズが出てこないという課題があります。それから、これからの課題なんですけど、円滑なマッチングと如何に継続して行くかが課題になっています。「応援隊」は、是非これからも継続して行きたいというふうに考えているのですが、プライバシーなどを守るため拒否する集落も結構あります。しかし、「応援隊」が入ることによって信頼して頂ける、そういう中で本来困っている生活対策、活性化策、そういうものを「応援隊」を絡めて色々と信頼を得て協議を進めることが出来るのかなと思います。それで「応援隊」を絡めたフォローアップのあり方を市町村とともに詰めて行って、元気な地域づくりを目指していきたいと考えております。以上です。



司会（波木）＞

ありがとうございました。今、国のお立場、県のお立場ということで、お二人の方から進めておられる小集落対策という事をお話し頂きました。何れも、先ずは集落そのものの実態を把握する、その中でモデル的にどういうやり方をすれば良いのか、特に、外部を入れた地域集落の活性化という形での一つの仕組みを模索されています。大分県の井上さんの方では、それをもう一つ広げて、県内全域に「応援隊」という一つの地域支援の仕組みを広げられているという事をお話を頂きました。何れも住民という地元の方がおられて、そこに行政の方が支援されながら、うまく外部との交流を図って行く事の仕組みづくりを想定されているようですけれど、その辺りをもう少し進化させる、もしくは広く拡大して行くという時に、もう一つ工夫があるか無いか、その辺りのところを後程、少し話をお聞かせ頂けたらと思います。

では、続いて住民の立場からということで、お二人からお話を聞かせて頂きたいと思います。都市部では無い地方部に住んでおられ、地域にある課題というものを住民の立場から把握して、地域活動に繋げて行かれているということが、お二人の共通するところです。

先ず、渡邊さんにお話を聞かせて頂きたいと思います。先程、自己紹介でもお話がございましたが、私ども共助研とは「柴北川プロジェクト」ということで、お付き合いをさせて頂いておりますけれども、そもそもそのプロジェクトの関わりを作るきっかけになった「柴北川を愛する会」の活動をどういう形で進めてられたのか。渡邊さんの経歴をお聞きしますと、犬飼町長谷地区で生まれ育ったのですが、25 年位宮崎県の方に仕事で移られ、また戻って来られたというＵターン組ということになりますね。一旦外部に出て、外部の色々な地域環境を経験された後に、もう一回地元の故郷に戻られた形、その辺りがキーワードかなと感じていますが、その辺りも含めてお話をお願い致します。

渡邊氏（柴北川を愛する会）＞

私が今住んでいる地域の現状ですが、戸数的には 305 戸、人口が 800 人ちょっとという地域に住んでおります。位置的には、大分県の豊後大野市という大分県のほぼ南部になるのですが、典型的な中山間地になります。25 歳の時に宮崎県の方に移り住みまして、そちらの方で商売をしておりました。こちらの両親が年老いて来たもんですから、平成 10 年に大分の方へUターンして参りました。帰って来た時に一番感じたことが、先ず人が少ないということと、昔のように隣近所のコミュニケーションがなかなか取れていないのではということを真っ先に感じました。小学校の方も先程来、度々出ておりますけれども児童生徒数も極端に減っておりました。ご他聞に漏れず少子高齢化が始まっているのだなというふうに思っておりました。私が子供の頃によく遊んでいた柴北川は、そのままの形で残っているのですけれども、護岸工事等で流れが変わったりとか、淵であった所が浅瀬になったりとか、自然環境も変わって来ておりました。ゆくゆくは、10 年もすると小学校が無くなるのではないか、年寄りが多くなって子供の姿が見え無くなるのではないかという懸念を、その時に直感的に抱いていたのですけれども、仕事の関係等でどういうふうにしたら良いのか、という方法も分からないまま年月が過ぎ去って行きました。

ある時、「大野川流域ネットワーキング」という会があるんですけれど、これは「大野川」をキーワードに大野川流域の地域づくりをしている団体が、大分市から高千穂町、熊本県産山村などをひっ包めて 40 位の地域づくりをしている団体があるのですが、そういった団体がネットワークで結んで、地域づくりをしようという壮大な計画をしている運動に巡り会いました。今日、見えている事務局長の幸野さんに、地域づくりとはどういうものか、元気のある地域はこういうことをしているというような事を勉強させて頂きました。

「大野川流域ネットワーキング」の話を少しさせて頂きますと、ただ単純に 40 の地域づくりの活動をしている団体が、日頃は勝手に各地域で活動しております。年に 1 回集まって、11 月 1 日を「川」の字に見立てて、「大野川の日」と定めまして河口から源流まで、その日一斉に大掃除をしようというのが、一つの大きなネットワークの行事です。そういった中で、本流の大野川、それから支流が 138 本あるんですが、その大野川に感謝する意味で各支流の源流に「源流の碑」を建てて、地域起こしのきっかけには出来ないだろうかということで、各支流に「源流の碑」を建て始めました。昨年までで 17 碑を建てていますが、まだまだ 100 年位続けないと全部の支流、源流には碑を建てられないんですが。たまたま、それが柴北川に平成 16 年に建てて頂くようになりまして、それをきっかけに「柴北川」をキーワードにして、先程出ました長谷地区が元気になる方法はないかというような事を考えて、10 人の発起人が長谷地区と言いますけれど、8 自治区が集まった地区が長谷地区と総称しているのですけど、その長谷地区を歩き回りまして、柴北川の掃除をしようやと、県道が一本通っているのですが、県道を綺麗にしようやないかと自分達の地域を綺麗にすれば、外から来るお客さんも増えてくるのではということで、10 人が各地区を歩き回りまして、平成 18 年 7 月に「柴北川を愛する会」が発足しました。発足当時は、94 名の方に参加して頂いて、活動を続けているのですけれども、一遍に「地域起こし」や「地域づくり」と言っても取っ付き難いので、先ず「県道に花を植えよう」ということで、ある地区の婦人会の方々が、県道沿いに彼岸花を植えていましたので、それを真似て地区の 10㎞ 程ある県道の両脇に彼岸花を毎年植えて行

っております。昨年、やっと全部繋がりまして、昨年の秋には見事な「彼岸花ロード」が出来ています。これは、子供からお年寄りまで、花を見てしかめっ面をする人はいませんので、非常にニコニコした顔で見ております。それだけではなく、昔の柴北川のようにもう少し綺麗にならないかということで、柴北川の大掃除を始めようということで、これも毎年 11 月に行っています。

この二つを柱にして、啓蒙と言うか地区の「あの人達は、この寒いのに川に入って何をしているのだろうか」と「気づき」をしてもらえれば良い、「彼岸花も綺麗だな、こういった形で地域が綺麗になるんだな」と「気づき」をしてもらいたいという思いで継続をして来ました。余り急激に色々やっても長続きはしませんので、彼岸花を植える、それから柴北川の大掃除をするという二つを続けていましたところ、「大野川流域ネットワーキング」の 10 周年シンポジウムがありまして、その時に「夢アイディアコンテスト」というのを共助研の方と一緒になってやったんですが、その中でたまたま花作りを中心にした故郷づくり「花一杯の故郷づくり」というテーマで、たまたま法螺を吹いたばっかりに、共助研のお耳にとまったみたいで、「一緒にやりませんか」という形で始めたのが「柴北川プロジェクト」です。

昨年の 9 月から始めたわけですが、私達が毎日見慣れている風景は当たり前になっている風景で、柴北川は綺麗であるし、山桜が綺麗であるというのは当たり前の世界になっていて、全く意識の中には無かったのですが、博多の方から共助研の皆さんがおいでになって、「山桜が綺麗じゃないか」、「柴北川が綺麗じゃないか」というような事を気づかせてくれました。その中で、先程の共助研の発表にもありましたように、一緒にやって来ておりますが、一つの課題として非常に保守的な地域なものですから、先程も松本さんの方からもありましたが、「他所者が来て何をやるんだ」というような違和感があります。それが、一つの課題かなと思います。

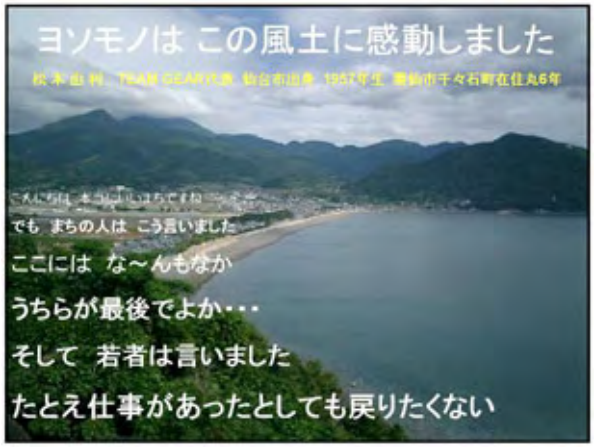
それ以外に良い点としましては、私達が全く気づかなかったことを気づかせてくれている、「自分たちの地域には、こんな宝物がやっぱりあったんだ」という気づきをさせてくれています。それから、8 自治区ありますと温度差もありまして、「この地区は地域づくりには余り協力的でない」とか、そういった内部でも不平不満が出ているという部分もあるのですけれど、皆さん共助研の方に入って来て頂いて、「一つになった」という 8 つの地区の意志が一つになって、「では、何かをやりましょう」ということでワークショップを開催しているところです。そういった形で、今進んでいますので、良い面、悪い面がこの半年間で極端に出たかなというような現状でございます。

司会（波木）＞

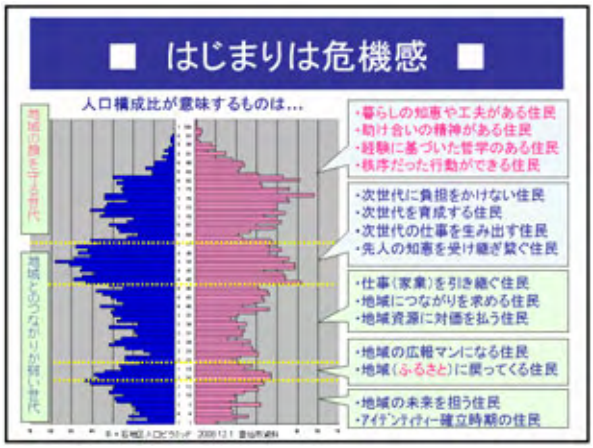
ありがとうございます。今、柴北川の方では、我々が入ることで、「他所者」という見方をされているという問題点も指摘されていましたが、そういう意味では、次にお話頂く松本さんは、仙台から移って来られた、全くの他所者であったわけですね。言わば I ターンですけれど、そういうお立場で、今かなり活発な地域づくりをされています。地域づくりの内容については、マスコミ等でも発表されていますので、少しそれは置いておきまして、地域の方とどういう繋がり方、関わり方を作っていかれたかという観点で、お話を頂けたらと思います。実際、外部の人間の立場ということで入られていますので、それが有利であった点もあ

ったでしょうし、逆に不利であった点もあったでしょうし、その辺りをどうカバーされて行かれたか、実際活動される時に、例えば行政の方とはどういう関わりをされていたのか、松本さん以外の外部の方とはどう関わっていらっしゃったのか、その辺りを含めてお話を頂けたらと思います。

松本氏（ＴＥＡＭ　ＧＥＡＲ）＞



非常に難しい課題を沢山頂いて、ありがとうございます。パワーポイントで話をさせて頂きます。2003 年に千々石町を一望した時の第一印象ですが、「これは理想的なコンパクトタウンだ」と、「未来の答えがここにある」と、私は一目でこの町が気に入ってしまいました。しかし、町の中を歩いて地域の人に声をかけると、「ここにはなーんもなか、うちらが最後でよか」と地域の人は声を揃えて言います。また、若者は、「例え仕事があったとしても、こんな町には戻りたくない」と言うことが非常に多かったです。



案の定、千々石町の人口の構成比はご覧の通りで、地域独自の顔を作ってくれている世代、ここでは 65 歳以上ですが、この方たちが亡くなってしまったら、車で移動する下の世代や僅かな子供達だけでは、町が機能しなくなってしまうのではないかというのが、私の活動のきっかけとなった危機感の一つでした。

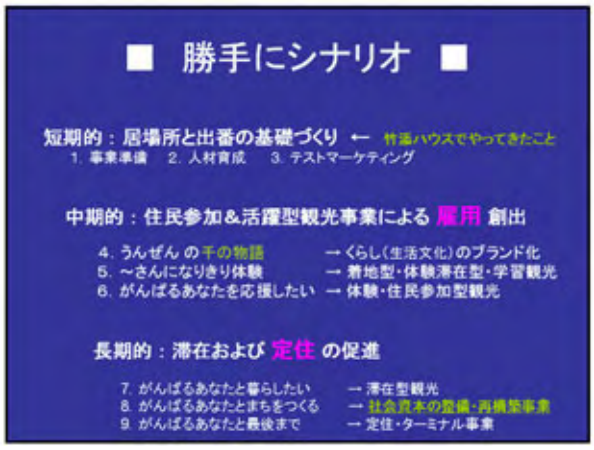
そこで、頼まれもしないのに、「ヒト・カネ・コト・モノ」の 4 つの視点から、町の問題を解決するための課題を整理してみました。先ず一つは観光の手法で、地域に必要な多様な人を集めること。二つ目は、集まった人達と地域の人達が、なるべく定住してくれるような雇用を生み出して行くということ。三つ目として、これからはそれだけでは足りない部分を補うような相互扶助の仕組みを作って行くこと。四つ目として、この 3 つの課題を実行して行くための人材の育成、それが出来る生涯学習の仕組みづくりの 4 つの課題を同時に進めていかなければならないと考えました。

地域の問題と 解決に向けた4つの課題

視点	問題点	予測	課題
ヒト	少子・高齢化による モノカルチャーと人手不足で変化に弱い	人口構成比の偏りによる人的活力の低下	① 地域に必要な多様な住民獲得
カネ	人口減少と産業不振 猫の目の市場原理	日本全国の産業衰退による税収の激減	② 家業強化創出と新しい経済循環のしくみづくり
コト	税収不足に拍車をかける少子高齢化	公的サービスの質・量の低下	③ 税収不足を補う相互扶助のしくみづくり
モノ	住民自身による地域資源の浪費	生活文化度低下による　地域イメージの悪化	④ 生活文化調査と生涯学習のしくみづくり

そして、実現に向けて勝手にシナリオを作成しました。先ずは、短期的な計画として、地域に必要な人が集まれる「出会い」と「居場所」と「出番」を作っていかなければと、他所者の視点から感じたことを実行に移しました。実はここに至るまでが大変で、他所者に対しては、地域の人は非常に閉鎖的な部分がありましたので、これを解決するために行ったのが、自己紹介を兼ね前職でやっていた企画展示です。5ヶ月位かけて紹介しながら、その後も地面の下を這い蹲るようにして、短期計画というものに、4年もかけて拠点づくりをしようと活動してきました。

千々石町の良さを大切にしてくれる地域内外の人が、集まりたくなる居場所を千々石町らしい風情を感じる所に作ろうということで、5年目の2007年10月に、空家になりかけていた住居併設の元病院だった家を借り受け、地域の信頼の厚かった大家さんのお名前をお借りして「竹添ハウス」と名づけ、荒れ果てていた施設の整備などを自力で始めました。千々石町の素敵な人達と、色々な町の人達が、千々石町の生活文化を、竹添ハウスでの出会いをきっかけに体験してもらい、広げて行ければという思いで、ここを借りたわけです。2007年10月に借りた時には、左のような状態だったものを、1年間かけて自力で何とか原形を表すようなところまで整備して、今は2年経っていますので、石釜やバーベキューの施設も出来て、大分綺麗になって来ました。このように、全く歩けないひどいジャングル状態だったわけですけれど、畑も開き、散策も出来るようになってきました。



やっと綺麗になった竹添ハウスで、2008年10月から毎月開催しているのが、会員制異業種交流会「まんぷく友の会」です。ここに集まった仲間達から、地域課題を解決するためのコミュニティービジネスとか、相互扶助のシステムなどを生み出して行こうというものです。ここには、地域内外、行政、企業、団体、大学などから色々な人がやって来ます。スイスとか、シンガポール在住の日本人や、東京在住の地域プランナーとか、長崎の人、地元の人、20代から70代まで様々な方が来て、いろんなことを話し合っています。それをケーブルテレビのネットワークを使い、地元の方に発信して、地元の人の理解と参加を促して行くという考え方で活動しています。地元の人に直接、「あんた入らんね」と言ってもなかなか歩み寄って頂くことは難しいので、「新聞に出とったね」、「テレビに出とったね」ということで少しずつ興味を持ってもらうように心掛け、やっと今頃になって、「何か面白いことをしているね」と言ってもらえるようになりました。

ＴＥＡＭ　ＧＥＡＲ構想ということで、少しずつ展開をしておりますが、こちらの写真が今迄集まってくれた人達です。行政から、観光カリスマから九州観光推進機構の方々、北海道やいろんな所から人が、実に多様な人達が来ています。

竹添ハウスには、お客様や主役様はいません。皆が主体です。ということで、地域の役に立ちたい、千々石町が好きだから協力をしたいとか、自分は千々石町の住民だから何とかしたいという志が一つの人達、同じ方向を向いている人達で、交流を始めているところです。

おかげさまで、今では、着地型観光商品を作りたい、地元の産品を生かしたいなどという事業の芽が出始めています。そして、千々石町の生活文化を伝える活動なども、新聞などにも取り上げてもらえるようになっています。これらは、私の夢である空家や、十分に活用されない地域のランドマークとなるような施設を「価値を生む社会資本」として再構築、再活用したいという夢の実現に向けて、ここを中心に展開して行く上でのツールになって来ますので、大事に育てて行きたいと思います。恐らく10年位かかるだろうと思いますが。この活動に、

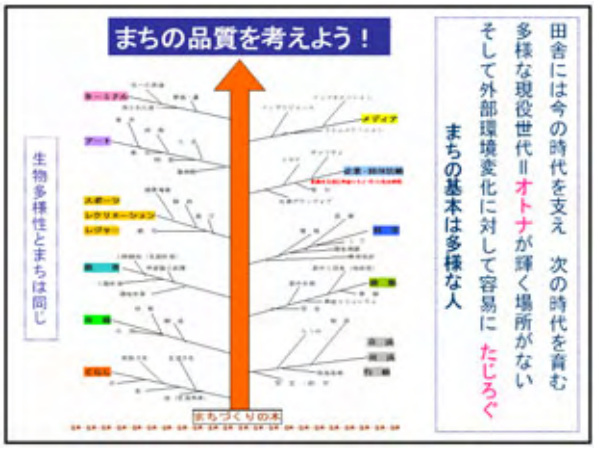
子供たちをどんどん取り込んで行って、今度は子供達が自分達の活動の積み重ねを、自分の商品のセールストークとして自らの口で、自らの言葉で喋れるようにと考えてやっているところです。

何よりも嬉しいのが、千葉県にお住まいの大家さんが、朽ちかけていた家が大切に使われているという事を非常に喜んで下さって、お盆にご家族でゆっくり滞在したいとおっしゃって下さっていることです。大家さんとの交流が積み重なって行けば、もしかしたら千々石町の若者と七海ちゃん、亜海ちゃんの恋が芽生えて、なんてことにもなるかもしれませんので、定住とか二地域居住のきっかけになって行けば良いのではと思っています。そして、この竹添ハウスがあるという事を、他所から聞きつけた千々石町出身の方が、「もう実家は無くなってしまったが、友達もいるので、自分の家のような形で、この竹添ハウスを活用して長期滞在したいので、今度滞在させてくれ」という話も出て来ております。

良いこと尽くめのように発表しましたが、先程自己紹介の時にお話しました、4 つの課題と 4 つの敵と戦っているところです。1 人で全部、自腹でやっているのですが、行政の様々な補助金などの施策は、仕組みづくりとか、それに関わる人件費とか、一切担保されないものですから、その辺りが今、非常に大変なところです。ただ、最近ようやく、国や民間団体、民間会社などから仕組みづくりに関する補助金が出るようになって来ましたので、そういったところにも応募しながら、そろそろ「自腹」を脱皮してやって行きたいと思っています。

それをやる上で、民間の助成金に応募中の 10 枚の企画書を持参しましたが、これに関わる人達との連絡や調整に、1 週間位かかってしまうのです。その間にも、竹添ハウスには草が生えるし、トイレットペーパーも買いに行かなければならないし、全部並列でやっているのです。これが採択された場合、今度は実施計画を立てて、オペレーションを一人でするのは非常に辛いです。その辺りの中間支援組織的な役割を、建設コンサルタンツ協会さんが担ってくれたら非常に助かると思います。そうすれば、私はプレイヤーに徹することが出来ると思います。プロデューサーとかオペレーターと同じ方向を向いて走れるプレイヤーがいないと、どんな企画も実現が難しいのです。

これからは、地域や業種などの枠を超えて価値観を共有する新しいコミュニティーが、地域づくりの核になって行くのではと思います。今の町にしたのもこれからの町を作るのも、住民です。いろんなＧＥＡＲが集まってやって行きたいと思います。



最後になりますけれど、これは、私が良く使っている「まちづくりの木」ですが、町には色々な要素があります。色々な要素を担う人達の、どこが足りないのか、どんな人が必要なのか、ここが明確でないままに、イベントなどで人を集めても、ゴミを置いて、トイレを使って、帰って行くだけです。私は、この図をコンセプトをぶれさせないために使っています。これを横にすると、品質管理の特性要因図になりますので、どこが足りないか、だんだん見えて来ます。衰退する地域は、生物多様性と全く同じで、住民に多様性がなく、モノカルチャー化していることが、大きな問題になっていると思います。多様な人材を集めるためには、何をしたら良いのかということを考えてやっているのが私の活動です。ありがとうございました。

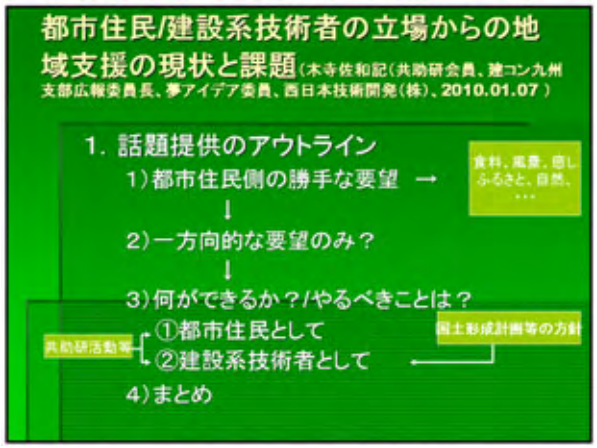
司会（波木）＞

ありがとうございました。今お二人から住民の立場ということで、色々活動されている状況と課題を話して頂きました。地域の資源を使って、発想して、町づくりに繋げて行くというところで、最後に松本さんの方から話がありましたが、出来ればプレイヤーとして専念したい、そこをサポートするプロデューサーみたいな外部的な支援のような形があると、もっと進むのではないか。それは、渡邊さんの方でも、共通した認識ではないかと受け取りました。

時間が迫って参りましたが、最後に、都市住民としての第三者の立場ということで、お話を頂こうと思います。

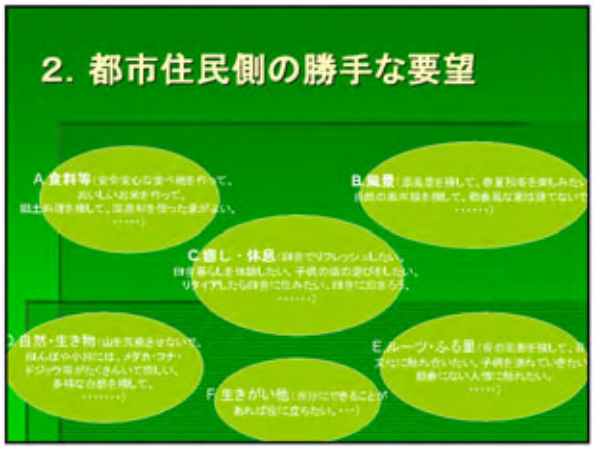
先ずは木寺さんですが、建設コンサルタントにお勤めで、共助研の仲間でもあります。ご出身は長崎、大学時代から福岡で暮らされているということで、基本的には福岡の都会人ということであります。その中で、地域に関わって来たその際に、都市の人間という立場での関わりと、その事の意義、それから今後の展開の進め方などをお話頂ければと思います。

木寺氏（建設コンサルタント）＞

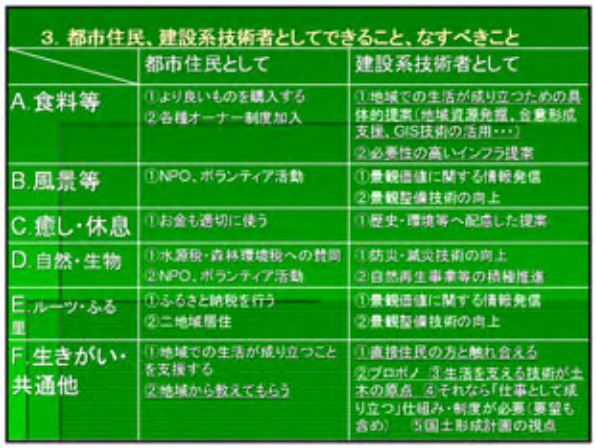


私が波木さんから与えられたテーマは、都市住民の立場と、もちろん建設コンサルタント技術者の立場から、どういうふうに考えているのか、どういうふうに行動するのかということですが、建設コンサルタント技術者としての出番が少ないというような話の流れになっていますので、実は出番があるのではという軸足をそちらに向けて話したいと思います。話のアウトラインと

しては、私は福岡に 30 年間程住んでおりますので、都市住民になりますが、地域側、田舎側に対して、どういう勝手な要望があるのか、ざっと整理してみました。もちろん、一方的な要望で良いのかというのは当然考えるべき事ですので、では私達に何が出来るのか、何をやるべきかといった事を都市住民として、建設系の技術者として考えること、その中で波木さんから共助研で活動しているのだから、共助研活動の実績も踏まえながら、考察しなさいということも追加して作って来ました。そういう順番で話したいと思います。



一般的に、都市住民として思うのは、「食料」、「風景」、「癒し・休息」、「自然・生き物」、「ルーツ・ふる里」、「生きがいの場」というように分けられると思います。例えば、安全なお米を食べたい、郷土料理を残して欲しい。原風景を残して、春夏秋冬を田舎で楽しみたい。「癒し・休息」のところだったら、田舎でリフレッシュしたい、田舎暮らしを体験したい、子供の頃の遊びをしたい、テレビの番組ですけど田舎に泊まろう。それから、「自然・生き物」については、山などが荒れ放題のままだと行っても情けない、寂しいので山を荒廃させないとか、田んぼにはメダカや昔の様にフナやドジョウも居て欲しいと思います。「ふる里」ですと、昔の面影が全く無くなってしまうのは非常に寂しいので、絶対それだけは残して欲しいとか、昔の文化に触れ合いたい、子供を連れて戻りたいとか、都会に無い人情に触れ合いたいとか勝手に言います。それから、「生きがい」と書いていますけれど、自分に出来る事があれば、何か役に立ちたいという気持ちも当然持っています。これらは、都市住民側の勝手な要望です。



3. 都市住民、建設系技術者としてできること、なすべきこと

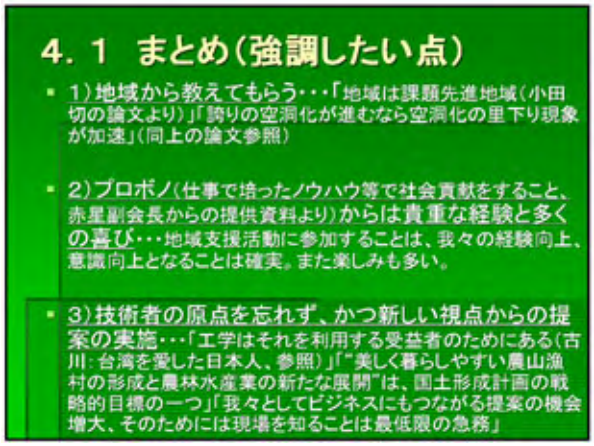
	都市住民として	建設系技術者として
A.食料等	①より良いものを購入する ②各種オーナー制度加入	①地域での生活が成り立つための具体的提案(地域資源発掘、合意形成支援、GIS技術の活用・・・) ②必要性の高いインフラ提案
B.風景等	①NPO、ボランティア活動	①景観価値に関する情報発信 ②景観整備技術の向上
C.癒し・休息	①お金も適切に使う	①歴史・環境等へ配慮した提案
D.自然・生物	①水源税・森林環境税への賛同 ②NPO、ボランティア活動	①防災・減災技術の向上 ②自然再生事業等の積極推進
E.ルーツ・ふる里	①ふるさと納税を行う ②二地域居住	①景観価値に関する情報発信 ②景観整備技術の向上
F.生きがい・共通他	①地域での生活が成り立つことを支援する ②地域から教えてもらう	①直接住民の方と触れ合える ②プロボノ ③生活を支える技術が土木の原点 ④それなら「仕事として成り立つ」仕組み・制度が必要(要望も含め) ⑤国土形成計画の視点

次にこれら、各項目について、都市住民として出来る事、成すべき事、それから建設系技術者として出来る事、成すべき事に分けて考えてみたいと思います。時間が限られていますので、詳細に触れることは出来ませんけれど、都市住民として出来る事と言ったら、例えば「E.ルーツ・ふる里」の項目については、「ふる里納税」を行うという事があります。「C.癒し・休息」の項目では、「お金を適切に使う」があると思います。お金持ちの人は田舎に行ったら、適切にお金を使うよう是非お願いしたいと思います。二地域居住も良いと思います。非常にしてみたいと思います。

それから、今日、強調して行かなくておけないのは右側の方ですね。私達の出番があるのかという事です。色々な意味で、生活が成り立ちにくくなっているというご報告がありましたけど、それに関して具体的な問題があるから、自分達で提案出来ることが絶対あるはずだというところに、私達の仕事の幅の広がり、新たな仕事のやり方があるということで、地域

資源の発掘とか、合意形成の支援、ＧＩＳ技術の活用と色々あるはずです。それから、必要性が高いインフラに対して提案すると、この辺は当たり前で、相当要望がある、課題があるのだったら技術者として勉強して、提案すべきだと思います。行政等に置かれても厳しい情勢ではありますが、そういうニーズがあれば、必要性の高いものから予算が付くと確信しています。景観等に関する価値評価、整備の仕事は増えて来つつあると思います。

それから一番下の「Ｆ.生きがい・共通他」についてですが、①建設系技術者として直接中山間地域に行って、住民の方と触れ合えるという事は、自分たちの原点です。私達の仕事が、直接住民の方の課題解決に繋がるという事が仕事なんだということですから、直接住民の方と触れ合えるというのは、素晴らしい機会だと思います。②のプロボノについては、赤星副会長から教えてもらったことですが、後で説明します。③番目に生活を支える技術が土木の原点で、仕事としても成り立つ仕組み・制度が必要で、要望も含めてなんですけど、お困り事があるなら私達の技術がそれを支える、それが仕事としても成立するだろうと少し甘い気持ちも持っています。



まとめたいと思いますけれど、都市住民としての立場から一番強調したいところは、①地域から教えてもらう事が多いということです。これは小田切先生の論文からの引用ですけれど、地域というのは、都市より先に高齢化にしろ、少子化にしろ、課題が先に出て来て、それに向かっておられる地域だから、都市住民は地域から学ぶべき事が多いのではということで、地域は「課題先進地域」ということを、意識して教えてもらう事が多いと思います。

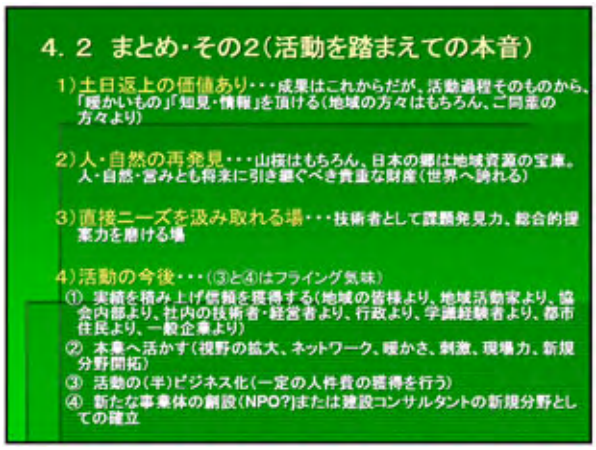
それからもう一つ、松本さんが触れられたと思いますが、3 つの空洞化の他に 4 つ目の空洞、「誇りの空洞化」が進んでいるというご指摘があります。もし、「誇りの空洞化」が進むということでしたら、空洞化というのは里下り現象と言いますか、一般の我々が住んでいる都市部まで来る、そういうことがあるから地域から教えてもらうという事は、都市住民にとって非常に大切だという事です。

②番目のプロボノ、これは赤星副会長から教えてもらったばかりですが、仕事で培ってきたノウハウ等で社会貢献することです。プロボノからは、貴重な経験と多くの喜びがあります。地域資源活動に参加することは、経験向上、技術の向上を含めて意識向上に成ることは確実です。あと、楽しみが多いです。山桜班とワークショップ班は、合同で色々な事をやりましたけれど、非常に楽しい事が多かったです。

③番目は、技術者の原点を忘れず、かつ新しい視点からの提案の実施で、「工学はそれを利用する受益者のためにある」、これは「台湾を愛した日本人」の本の中に出て来る文章です。美しく、暮らし易い農山漁村の形成と、農林水産業との新たな展開というのは、国土形成計画の戦略目標の一つです。私達のビジネスに繋がる提案の機会が、十分にあると思います。そのためには、先ずは現場に入って、現場をきちんと把握することが最低限の急務だと思い

ます。

あと 1 枚だけ、追加の分を説明させて頂きます。共助研の活動を踏まえての本音で、「1)土日返上の価値あり」と言うことです。これは、暖かいものや知見情報を頂けるということです。暖かいものの中には、カボスの入った豚汁もありますし、イノシシの味噌漬けもあります。その他に、やっている中で、地域の方々から何か暖かい物を貰えます。一緒に行っているメンバーから助けてもらったり、車に乗せてもらったりもしています。この暖かい物が、日常の業務にハリになっています。これは、土日返上の価値ありです。



それから、「2)人・自然の再発見」で山桜はもちろん、日本の故郷と言われている所には、色々な地域資源の宝庫があります。人、自然、営み、これは将来に引き継ぐべき貴重な財産と言うことで、一部の方は世界に誇れるのではというように言われています。

「3)直接ニーズを汲み取れる場」と言うことで、技術者としては現場のニーズをきちんと課題発見する力、また、色々な問題を総合的に解いていかなければならないということで、総合力を身に付ける場という事になると思います。

4)番目に今後の活動ですが、先ずは①番に実績を積み上げて、信頼を獲得するということです。共助研の活動も含めて、これは地域の皆さんもそうですが、協会の内部や社内から、「あいつらは何をしているのだろう」というふうに言われます。こちらは相当切実な問題になっております。行政から、先生から、一般の方から認めて頂いて、共助研の活動を認知してもらうという事です。

②番目がですね、直ぐにビジネスに繋がらなくても、本業へ活かすという事で、色々な切り口があると思います。ネットワークにしろ、色々な現場に行くにしろ、新分野開拓、今の本業に活かすことが出来ると思います。

③と④はフライングですけど、出来たら一定の人件費を確保出来たらと思います。あと、最終的にはこういう分野で、事業主体で共助研がＮＰＯになるとか、それが無理だとしても建設コンサルタントの新規分野として確立が出来ると、未だ夢の階段かとは思いますが、希望しております。

司会（波木）＞

ありがとうございました。一番最後のところに本音が出ておられましたね。最後に吉武先生の方から、総括的なお話を頂こうと思っていますが、今日、せっかく皆さんにお集まり頂

いておりますので、会場の方からご意見、ご質問等がございましたら、お受けしようかと思います。どなたからでも結構です。挙手をお願い致します。

参加者Ａ（幸野氏）＞

大野川から来ました幸野と申します。久しぶりに、熱い、非常に有意義なシンポジウムに参加させて頂いたと痛感しております。一つは、大野川に入り込んで下さっている共助研の皆さん、もう遠慮無しに大きな手を広げて、地域住民を抱きしめるくらいの大きな付き合い方をして下さい。私は、柴北川でもない、共助研でもない、ちょうど中間にいるので良く見えるのですが、間違いなく柴北川の皆さんが動き始めております。特に、子供達が自主的に動き始めた事は素晴らしい事で、是非 3 月までとは言わず、とりあえず 3 月までの期限の中で、次のファシリテーターとして次の目標を皆さんに与えてくれたらいいなと思います。

それから、行政の方が出て来る時に必ず言うのですが、中山間地という問題になると地域だけのテーマになります。私達は、流域を視野に入れて活動しています。風土も歴史も文化も流域の中で、非常に共通した面があるので、是非、コンサルタントのプロの方が、その流域を視野に入れた「ソフトのインフラ」を管理して頂きたいです。歴史、文化、自然、河川も含めますからね。そういうものを皆さんが、行政に提案して、是非成し遂げて頂きたい。市民では出来ない、住民では出来ないのです。住民の地域の中では、一生懸命やれば出来ますので、それを超えたところ、例えば柴北川で何も宝物が無いとしても、隣の宝物を案内すれば良いのです。1 時間の範囲で離れている所は、自分たちの宝物だというとらえ方が出来ますので、客観的指標の中に、是非「流域」という隣の隣の町までの指標を持って作って頂けたらと思います。

もう一つは過疎地です。災害に非常に弱い所でもあります。私達「大野川流域ネットワーキング」は河川をやっていますが、防災研究会も始めました。携帯電話で、どこからでも情報を収集出来る仕組みを作りつつあります。ですから、過疎地が「情報過疎」になら無いように、今、都会地と過疎地を比べると、圧倒的に情報過疎地は従来の過疎地なんです。ここは、少しの力を加えれば過疎でなくなる、良い事になる仕組みですので、いろんな所へ提案して、実現して頂きたいと思います。中山間地の命に関わることです。以上です。

司会（波木）＞

ありがとうございました。共助研にエールを送って頂いたと思います。

参加者Ｂ（大塚氏）＞

私は、ご紹介頂いた柴北川の地元で、共助研の方のご指導を頂いて、今から発展をしようかと思って極力努力をしております。地元では、他所者から指導を受けたってと意見もありますが、私はそうは思いません。共助研の方には、今後ともご指導頂きたいと思うとともに、お礼を申し上げたいと思います。

参加者Ｃ（和泉氏）＞

今日は貴重なお話を多くの方から聞くことが出来、大変勉強になりました。ありがとうございました。今日の話題でいくと、私達建設コンサルタントという名前は、中山間地に行った時に相応しく無いな、という気がなんとなくしています。特に、建設をビルドすることが無くて、ソフトな面をビルドすることはあるのですが、そう感じました。これは感想です。

それから、幸い私は、地域の活性化や田舎起こしをするチャンスを良く頂くので、その経験でお尋ねしたい事があるのですが、大体の場合、今日お越しになっている松本さんや渡邊さんのようなリーダーの方がいらっしゃいます。いらっしゃらない所でコンサルティングをすると、契約が終わって翌年様子を見に行った時に、「私たちがやった後、集まりやっている」と聞くと、「1回も会っとらん」と大体言われます。リーダーがいらっしゃる所は、行政の方も応援し易くて、ずっと継続しているそうです。リーダーの方も色々なタイプの方がおられ、今日も松本さん、渡邊さんをお見受けすると、タイプが違う方かなと思っていました。リーダーの方の半分は、行政に対して「支援して下さい」という意識を持っていらっしゃるのですが、リーダーの方の残りの半分は、「皆さん、私に付いて来て下さい」という本当のリーダーシップを取られている方が多いようです。

何を言いたいかというと、吉武先生のお話の時に時間が無くて質問出来なかったのですが、吉武先生が色々な現場を見て来られて、地域を起こそうとする際、リーダーの方とどう付き合って来られたのか、リーダーの方と付き合う時に、私達コンサルタントが気を付けておいた方が良い事があれば、アドバイスを頂きたいなと思いました。先生に質問をさせて下さい。

司会（波木）＞

ありがとうございました。今のお答えと合わせて、今日の総括を一緒に吉武先生にお願いします。

吉武先生（宮崎大学准教授）＞

先ず、ご質問の方ですが、秋元地区にはリーダーがメインで 2 人位おられます。お年寄り世代にも、お年寄りの中でリーダー的な方々がおられます。幸いなことに、秋元地区の場合は、中堅のリーダーの人は役場の職員で、情報と企画力に長けていました。ただ問題は、例えば、私とリーダーが如何に意気投合して、「こんな事をやろう」と言っても実際は周りの人達がやらなければいけない訳です。そこでの「時間」と言ったのは、その辺で無理な事は出来ない。そこで 1 人だけ浮いてしまっても困るし、無理な事をして疲れてしまって、「もうやらない」というふうな事になってもしょうがないし、その中で人間関係が壊れて行く事もあってはいけない事ですから、その辺の時間の調整、やりたいと思ってもやらない方が良いという事は、実際気を付けた事です。

もう一つは、私は出来るだけリーダーとはすごく緊密ですが、その他の人達ともずっと個人的な関係を作るようにしています。彼らは、次のリーダーに成らなければいけないですし、そこの家族の人達の理解も得なければならない。その人達が楽しくなるように、その人達が役割をちゃんと担えるように。前にリーダーに頼んでいた事を、他の人に振ることもあります。「あなたやって」という感じで、別の人に振るということに気を付けているという事はあります。その辺は、建設コンサルタントの人達と違って、私の場合はずっとそこに居続けられますので、私なりのやり方です。もし、私が建設コンサルタントの方々にアドバイスするなら、リーダーだけではなくて、次の人達やあるいは周りの人達との関係、あるいはその人達のレベルをよくよく見ておくということが大事です。

総括ですが、一杯内容があって一言でまとめきれないのですが、先程松本さんのお話を聞いて、「ああ、これか」と思ったのが一つありました。自分の本職としてのデザイナーとしてのお仕事があり、その中でマーケティングみたいな知識を持たれていて、それを人間のネット、人間の人材の方に活かしてやる。建設技術者とか建設の専門と言うことですが、実はそれを建設で使うんではなくて、そこで培った、色々な物の考え方、例えばマネージメントもそうかもしれない、そういうものは実は、こういう村の問題に対して、応用可能なそういう知識の転換と言うものが出来る人が、実はプロの技術者であろうと思っています。これは実はメタなレベルな話ですけれども、そこはとても大事だと思います。

最後ですから、前向きな話をしなければと思うのですが、私はそういう意味も含めて、私は実は山口出身というご紹介がありましたけれど、母方の田舎が家 1 軒しかないのです。昔、30 軒あった集落でしたが、集落としては完全に無くなっているんですね。それが私は非常に悔しくて、私が土木屋ということも悔しい訳です。土木屋で何をやっていたのだと思いがあるんですね。これは、建設をやって来た土木のツケが回って来ている。集落だとか、コミュニティーだとか、地域だとかということを考えたことが無かった。私達はシビルエンジニアです。だから、今からの仕事と違うスタイルの役割を担うべきだし、担わなければいけない、

シビルエンジニアとしてやらなければいけないＤＵＴＹと思っています。ただ、これが「業」になるか、私達が食べて行けるかという話は、少しまだ難しいかなと思っていますが、これが「業」になるように努力しなければいけない。そういう意味で、「建設」というものが、少し重いなという話がありましたが、「新しい業」としてそこを起こして行くという事が、今からのコンサルタントの専門家としての役割で、そこを議論して行く事が役割だと思っています。それが地域に貢献できる、もちろん、地域に貢献するために、私達は居るのです。

ただ、そんなに辛い話ではなくて、楽しい話もあります。私はよく、高千穂で最近やっと言われ無くなったのですが、以前は「過疎問題を考える位なら、田舎に帰って田んぼを耕せ」と言われたことがありました。そのことが、何時も私の重みになっています。私は今、大学の先生として働いていますけれど、彼らに対して常に自問自答しながら、脅かされながらやっています。

もう一つは、日南の願成就寺という所に、シーニックバイウェイの仕事で行ったのですが、ここのお寺は、人生の中で 2 回だけ願いを叶えてくれるという所です。お参りに来たおばあちゃんに「願い事を使いましたか」と聞いたら、「2 回ともとってある」と答えが返って来ました。かなり高齢なのに、2 回ともまだ使っていない。「じゃあ、どういう事に使うのですか」と聞くと、「もう使わない、自分達の為には使わない、孫の為に使う」と言われました。

地域の人と付き合うと、こういう、私達が普通に思っている生活の中で、多分気づいていない、忘れている価値を、ドカーンと目の前に出してもらえます。そういう事があって、私は地域と付き合えるのだと思います。私達にはＤＵＴＹがあるという事と、私達が実はその中で成長出来るという事を踏まえて考えれば、共助研は今からこそ役割があるというところで、少し前向きの話でまとめさせてもらいます。

司会（波木）＞

ありがとうございました。示唆に富んだご提案を頂いたと思います。最後に皆さんから、今後の抱負、こんなふうに取り組みたいという事をワンコメント頂きたいと思います。

中野氏（国土交通省九州地方整備局）＞

集落の問題は、市町村なりで意識の温度差がかなりあります。ですから、そういったものを皆さんが一律的に取り組めるような事を、今後の検討委員会で議論して頂けるよう頑張って参りたいと思います。

井上氏（大分県企画振興部）＞

具体的に、現場に入ってやっている中で、集落によっては 10㎞ 以内に医者も商店も無いという実態があります。そして、景気が良くなっても、なかなか恩恵に預からないという地域があります。そういう条件引き地域において、何か活性化する手立てがあるのか、そういう対策を維持する場合に、行政だけでやるのか、それとも民間にやってもらう部分があるのかという中で、最近は、新たなビジネスが出て来ています。ソーシャルビジネスとかコミュニティービジネス、そういう地域の活性化のためにビジネスという手法を用いて地域を活性化する。活動して行くという事で、ＮＰＯ法人を中心に色々出て来ております。しかし、ＮＰ

O法人は資金不足、人材不足、情報発信が弱い、認知度が低いと色々な課題があります。共助研の方々は、色々な経験と高度な技術を持っておりますので、是非新たなビジネスを創出して頂きたいと願っています。どうしても行政だけでは、活性化策となると経済・経営的に難しいところもありますので、行政と情報を共有しながら、新たなビジネスを広げて頂きたいと願っております。

松本氏（ＴＥＡＭ　ＧＥＡＲ）＞

私の活動は、ようやくスタートラインに着いたばかりですので、一歩一歩進んで行くようにしたいと思っております。

先程、リーダーというお話がありましたけれど、私はリーダーのつもりは全くありません。誰も引っ張っていません。出来ればコーディネーターに徹して、私が前面に出なくても、周りの人がスタープレーヤーに成るようなコーディネーターを目指したいと思います。ありがとうございます。

渡邊氏（柴北川を愛する会）＞

共助研の皆さんと立ち上げました「柴北川プロジェクト」を、是非成就させたいというのが一つの願いです。

一つ報告ですが、「長谷探検隊」が先程出ましたが、隊長に中学 2 年生の女の子が「是非、私にやらせてくれ」と立候補しまして、今仲間たちとプランを練っています。今月の 20 日前後に、「第 1 回長谷探検隊の冒険」が出来るのではと楽しみにしております。

「柴北川プロジェクト」に対しましては、共助研さんのホームページの方に出ておりますので、是非ご覧になって頂きたいと思います。

今日は、豊後大野市の方から、観光案内のパンフレットを持って参りましたので、お時間がございましたら、是非柴北川の方へ遊びに来て頂けたらと思います。今日はありがとうございました。

木寺氏（建設コンサルタント）＞

共助研は、楽しさいっぱいです。ですがこのままだと、高齢化が進む一方ですので、高齢の方も歓迎ですが、若い方も是非共助研に参加して下さい。よろしくお願いします。

司会（波木）＞

ありがとうございました。私達は建設コンサルタントとして、こういう事に関わりをやろうとしておりますが、私自身、「建設コンサルタント」という言葉に、非常に自負と誇りを持っているのですけれど、皆さんのお話の中でも感じたのですが、「建設」というところで損をしているのではないかと思います。先程、キーワードがございましたが、「ソフトインフラ」や「地域プロデューサー」、そういう新しい概念で、私たちの社会的役割、位置づけを捉え直して行くということが、私達に課せられた大きな課題だと思います。

私達「共助研」という言葉を使いましたが、ある意味「共助コンサルタント」のような形で、地域の仕組み作りに関わって行けるような新しい対応と言うものを、「共助研」の活動を

通して深めて行きたいと考えております。今日は沢山の意義深いご意見を頂きまして、本当にありがとうございました。皆さんにお礼申し上げます。

これでパネルディスカッションは終わらせて頂きまして、「共助研」の「共助」の名付け親でもございます副会長の赤星の方から、閉会の挨拶をさせて頂きたいと思います。

Ⅲ．閉会あいさつ　　＜赤星副会長＞

みなさん、赤星でございます。長時間に渡るシンポジウムに参加していただきまして、本当にありがとうございました。一つのきっかけが、こんなに仲間が増えて集まり花開く、非常にうれしいことであります。心からみなさんに感謝いたします。

１部では吉武先生から、持続可能な村づくりに対する秘訣を貴重な提案としていただきまして、本当にありがとうございました。また２部、３部では、我々の活動報告も含めて、パネルディスカッションでご討議いただきましたパネリストの方々に深く感謝致します。ありがとうございました。

今日までいろいろなことがありましたけれども、郷づくりにはプランありきではなくて、まずは地域の方々との繋がりというか、持続可能な空気づくりが必要だなと感じがします。それから、我々は建設技術者という名前がありますけれども、先ほど波木さんが言いましたように、プロデューサーとしてあるいはサポーターとして、地域に入りながら信頼を得つつ、実績を重ねながら、得られたエネルギーを本業にも活かし、なおかつ、第３のコミュニティとして多方面に活用、還元、あるいは対流化することが、われわれの役目ではないかと私は感じました。

共助研の活動は緒についたばかりでございまして、今日のいろいろな課題を探求するように考えております。

本日お忙しい中、ご参加いただきました方々に重ねて感謝すると共に、我々と共に、先ほど木寺さんが言いましたように、熱意と英知を注いでいただく方々、特に若い方々の参加を心から歓迎いたしますことをお伝えしまして、閉会のメッセージとします。今日は本当にありがとうございました。

［　参考　］

シンポジウム「農山漁村の郷づくり」アンケート結果

ご意見・ご感想	回答者属性
●基調講演「持続可能な郷づくりと専門家の役割」について、ご意見、ご感想をお聞かせください	
・理論と実践両面共に素晴らしかった。	会社員　62 歳　男性
・「住民主体のまちづくり」「住民参加のまちづくり」は、やはり住民の意識、リーダーしかキーはないのだろうか。TEAM GEAR の松本氏の「外部のいい人」を「知縁、志縁」からのアプローチもあるように感じる。	会社員　62 歳　男性
・吉武先生の話はわかりやすかった。活性化のことに取り組んでおられるのをはじめて知った。（どうりでアポが取れない訳だ）	建設コンサルタント 41 歳　男性
・地域再生、集落再生には大変な時間がかかる。	コンサルタント 44 歳　男性
・コンサルはライフワークとしてならよいが、業務として関わる場合は短期的な関わりが多い。	コンサルタント 44 歳　男性
・地域再生のきっかけづくりにＷＳは有効な手段。	コンサルタント 44 歳　男性
・専門家として「情報提供」「ファシリティーター能力」が必要。	コンサルタント 44 歳　男性
・従来の建設コンサルタントの活動を超えたシンク DO タンクとしての活動に共感した。今後の活躍を期待している。	建設コンサルタント 39 歳　男性
・地元住民とのコミュニケーションの重大さがわかった。しかし、このための労力と時間、費用が継続するためにはどうしたらよいか今ひとつわからなかった。	建設コンサルタント 62 歳　男性
・「交流初動期」「信頼醸成期」「目標移成期」「目標追求期」の整理が分かりやすかった。秋元地区の今後の推移に期待したい。	会社員　33 歳　男性
・持続可能な郷づくりに、地域の人々の繋がりや意欲が重要な役割を果たすことは納得した。一方、企業では工期等も定まっているため、人との繋がりや信頼関係を構築するのに虚しいと思う。	建設コンサルタント 24 歳　女性
・今までは、「道路をつくる」など業務の成果が目に見えるものだったが、今後は、「人との繋がり」や「地域の活力」など定量的に示すことが難しい部分のサポートが求められていくと思う。この部分がビジネスとして成り立つ仕組みや、理解を得ることができる社会になるとよいと思う。そのために建設コンサルタントとして重要性を社会へ示していく必要があるのではないかと思う。	建設コンサルタント 24 歳　女性
・郷づくりにはこつこつとオーダーメイドで取り組んでいくことが重要という率直なご指摘と共に、業との関わりについても示唆して頂き個人としても、技術者としても参考になった。人、生活、環境、様々なレベルで対象を考えて郷づくりを考えていきたい。	建設コンサルタント 36 歳　男性
・深刻な過疎問題だが、楽しく続けていけるような努力が大切だと思う。もっと専門家の方の多くの参加が望まれる。	女性
・専門家は口や知識、知恵だけでなく、実践（寄り添い）が大切であることを改めて考えさせられた。	建設コンサルタント 47 歳　男性
・時間をかけた信頼関係がそのベースとして重要であることも教えて頂き、ありがとうございました。	建設コンサルタント 47 歳　男性

ご意見・ご感想	回答者属性
・自分が知っていて、うまくいっている、まちづくりの取り組みの共通点として、「外部の人との交流による地域の価値の再発見」（地域への関心 UP し、まちづくりのきっかけになる）や、自分達が楽しむためのイベントづくりがあると感じた。そのまちは、農山漁村ではないので、まちづくりや郷づくりへの地域住民の意識（誇りや責任感）の重要性を改めて感じた。	学生　21 歳　女性
●パネルディスカッションについて、ご意見、ご感想をお聞かせください	
・松本理事長の長期にわたる地域への取り組みの実例は大変参考になった。	建設コンサルタント 24 歳　女性
・ディスカッションの時間がほとんどないのは残念だ。	会社員　33 歳　男性
・パネラーの基本発表の時間が長くほとんどの時間を使ってしまったので、討論時間をもっと多くした方がよい。結果的に個人発表の用紙で終わってしまったことは残念である。今後は、討論を主体に実施した方がよい。	建設コンサルタント 62 歳　男性
・これから建設技術者になる（目指す）者として話を聞いたが、自分がこれから入ろうとする社会の中に土日を返上してでもやる価値あるものだ！という熱い思いを持って取り組んでいる先輩方がいらっしゃることがわかっただけでもよかった。	学生　21 歳　女性
・各パネリストの方々の日頃の活動に対する熱意が大いに伝わった。同じベクトルを持った人が少しでも多く共助していければと思う。	建設コンサルタント 47 歳　男性
・少し時間が短く、もう少し詳しい話が伺えるとよかった。	建設コンサルタント 47 歳　男性
・住民、行政、第 3 者の立場から様々な意見を聞かせて頂き、有意義であった。	コンサルタント 44 歳　男性
・もう少し、討論などがあれば、もっと中身の濃いものになったのではないか。	女性
・発表して頂いた方やそうした方々の立場相互のコミュニケーションが聞きたかった。今後、実社会で展開されるのだろう。	コンサルタント 36 歳　男性
・テーマ、パネリストの選定が素晴らしかった。パネリストのＰＲもよい。	会社員　62 歳　男性
・残念ながら、時間が足りなかった。パネリスト同士、会場との質疑が必要。	会社員　62 歳　男性
・このテーマだけで半日のシンポ（セミナー）が必要。その時には、まちづくりに関わっている一般の方も参加できるセミナーにする。（会員募集）	会社員　62 歳　男性
●共助研の活動に対して、ご意見、ご感想をお聞かせください	
・一般の方も参加できるセミナー開催を共助研の次のステップとして大々的に開催してほしい。（新たな公、ビジネスメニュー構築の際）	会社員　62 歳　男性
・防災問題に対し、GIS（携帯）を活用したビジネスを期待する。（本業は景観整備や建物、橋の長寿化）	会社員　62 歳　男性
・中山間活性化の仕事はよくしている。いつか関わってみたいと思う。	建設コンサルタント 41 歳　男性
・GIS や事例データベースは取り組む必要はない。せっかくお金を使っても、やぶん使いにくいデータになるだろう。業務上でも必要ない（単なる研究？）	建設コンサルタント 41 歳　男性
・中山間地の補助事業データベースがほしい。多くの象徴に関係するので、これがあれば有用である。	建設コンサルタント 41 歳　男性
・様々な取組を協会内部（自己の学習）にとどまらせず、報告してほしい。（論文、出版等）	建設コンサルタント 36 歳　男性

ご意見・ご感想	回答者属性
・素晴らしいと思う。今後もこのようなセミナーを企画してほしい。	女性
・HP を見せて頂く。事例収集は参考になりそう。	コンサルタント 44 歳　男性
・素晴らしい活動に感服している。あと一年は大変かと思うが頑張ってほしい。また、何かの形で継続されることを望む。	建設コンサルタント 47 歳　男性
・大変、興味ある活動だと感心した。もっと輪が広がるよう努力されることを影ながら願う。	建設コンサルタント 62 歳　男性
・GIS を用いた基礎生活圏の調査に大変興味がある。今後の活動に期待したい。	会社員　33 歳　男性